

坊は十間四面に、またびさし(又庇)さしてつくりあげ、二十四日に大師講竝に延年^{えんねん}、心のごとくつかまつりて、二十四日の戌亥^{いぬい}の時、御所^{おんもと}にすゑ(集会)して、三十余人をもつて一日^{いちにちぎょう}経かき(書)まいらせ、竝ひに申酉^{さかのとり}の刻に御供養すこしも事ゆへなし。坊は地ひき、山づくりし候ひしに、山に二十四日、一日もかた時も雨ふる事なし。十一月ついたちの日、せうぼう(小坊)つくり、馬やつくる。八日は大坊のはしら(柱)だて、九日十日ふき(葺)候ひ了んぬ^{おわ}。しかるに七日は大雨^{たいう}、八日九日十日はくもりて、しかもあたたかなる事、春の終りのごとし。十一日より十四日までは大雨^{たいう}ふり、大雪^{たいせつふり}下て、今に里にきへず。山は一丈二丈雪こほりて、かたき事かねのごとし。二十三日四日は又そらはれ(晴)て、さむからず。人のまいる事、洛中^{らくちゅう}かまくらのまち(町)の申酉^{さかのとり}の時のごとし。さだめて子細^{しさい}あるべきか。次郎殿^{じらう}等の御きうだち(公達)をや(親)のをほせと申し、我が心にいれてをします事なれば、われと地をひき、はしら(柱)をたて、とうひやうえ(藤兵衛)・むま(右馬)の入道^{にゅうどう}・三郎兵衛尉^{さぶらうひょうえう}等巳下^{いげ}の人々、一人もそらく(疎略)のぎ(義)なし。坊はかまくらにては一千貫にても大事とこそ申し候へ。ただし一日経は供養しさして候。

(弘安四年十一月二十五日)